北区飛鳥山博物館だより

ぼいす

Vol. 2

北区飛鳥山博物館
1999年3月15日発行

北区飛鳥山博物館

名所の情景

浮世絵系版画に描かれた王子・滝野川

春の企画展

入場無料

略画王子海老屋の図　喜久麿筆

近世以来、北区域は風光明媚な行楽の地・名所として人々に親しまれてきました。特に王子・滝野川は複数の名所ポイントが近距離に集中している点で、江戸近郊のなかでも際立っていた地と言えましょう。

絵画の世界においても、春爛漫の飛鳥山、紅葉の滝野川などが繰り返し題材として取り上げられました。なかでも錦絵と呼ばれる多色摺り木版画に多数の作品が残され、現在までに北区域に関連するものが約300点ほど確認されています。多くは風景画や名所絵ですが、美人画や役者絵、狐や狸が登場する戯画などもあり、表現方法と内容は実に様々です。また近代になって地域の状況が変化しても、なおも絵師や作家の心をとらえて描かれ続けました。

そこで春の企画展では浮世絵系版画に描かれた情景を通じて、この地域のもつ名所性の展開と推移を追いかけてみたいと思います。今回は特に共立女子大学教授・伊藤紀之氏のご協力のもと、氏の所蔵コレクションに当館所蔵資料を加え、江戸中期から昭和初期にいたるまでの作品を一同に展示します。是非ご観覧下さい。

【会　期】平成11年 **4月3日(土)〜5月30日(日)**

※観覧時間は午前9時30分から午後5時まで

【会　場】特別展示室

【休館日】4月5日(月)、12日(月)、19日(月)、26日(月)、30日(金)、5月6日(木)、10日(月)、17日(月)、24日(月)

【講演会】5月9日(日) 午後2時〜午後3時30分
「浮世絵系版画に見る北区域」
講師：共立女子大学教授　伊藤紀之氏
＊詳細についてはお問い合わせ下さい。

東京名所四十八景　飛鳥や満（部分）　昇斎一景筆

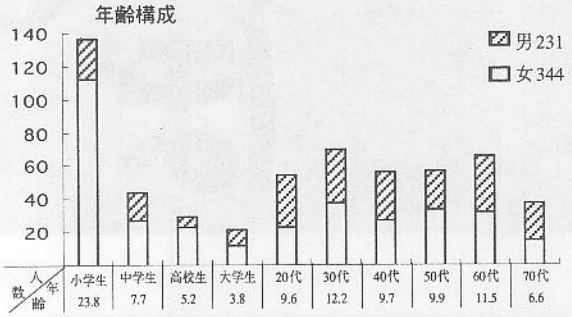
Voice

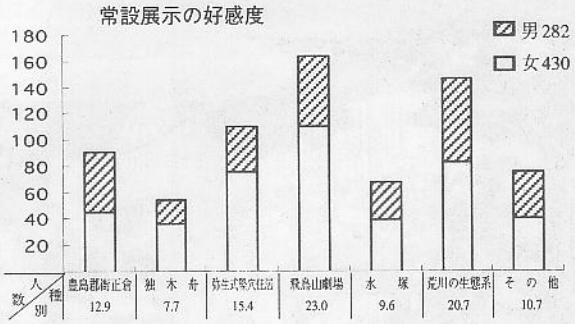
アンケートをまとめてみました！

来館者の方にご協力いただいたアンケートについて、平成10年3月の開館から平成11年1月分までの累計結果をご報告します。

「博物館のことをどこで知りましたか」については、「知人に聞いて」が一番多く、次いで「北区ニュース」でした。また、飛鳥山公園内にあるため、散策にきて知った方も多くいました。**「何回目の来館ですか」**については、開館してから間もないことから、はじめて来館の方が77％でした。来館者の居住地は北区内が一番多く、次いで東京都区内となっています。利用交通機関はJR京浜東北線王子駅が最も多く、また徒歩で来館された方も目立ちました。**「博物館の印象」**については、「大変良かった」「良かった」が70％を超えています。観覧料についても「適正である」との意見が50％近くを占めました。興味を持った展示は、人形劇の飛鳥山劇場、次いで荒川の生態系のジオラマなどです。また、その他の意見として展示全部や貝塚などもあり、複数回答も多く見られました。来館者の年齢構成等は、小学生が30％で一番多く、次いで30代の方、また親子での来館が多くなっています。

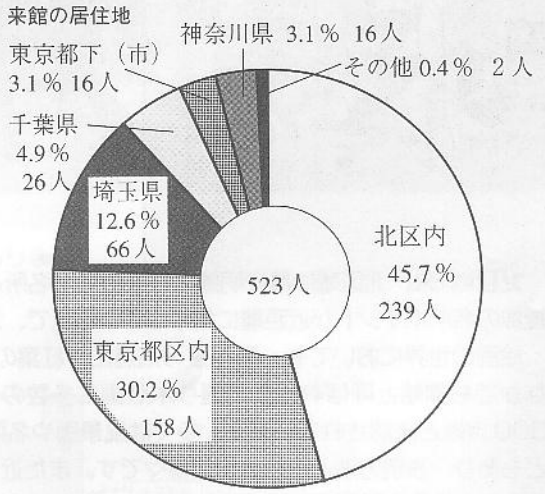
以上のアンケート結果を参考に、北区飛鳥山博物館をより広く多くの方々に知っていただけるよう努めて参りたいと思います。



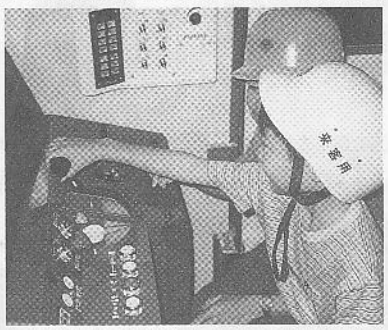


ひとこと意見

★図書コーナーに子供向けの本が増えてgood。貸し出しもしてほしい。
★映像による説明は非常によいと思う。しかし10分以上もある映像は長すぎる。
★解説文が難しい。専門用語をなるだけ使わないでほしい。
★展示が歴史に偏っている。もっと今や未来のことについてやってほしい。
★外国人向けに英語の説明があると良い。
★縄文土器のところに年代を入れてくれたら、古さを実感できて良かったのに。
★観覧料を無料に（北区民、身体障害者、月1回北区の日、60歳以上）。
★館内にいる限り、再入場を認めてほしい。
★常設展示を午後6時30分まで開いてほしい。
★博物館の場所がわかりにくい、もっと案内を徹底させて。
★企画展や事業があって面白そうなのに、北区外にすんでいるので情報が伝わらない。
★展示品が低い位置にあるので土器など楽しく見ることができた。
★区の歴史を掘り下げてほしい。
★3館が群立形成（博物館群）しているのは、大変興味深い。
★全体にコンパクトによくまとまっていて、大変よい印象。



イベント・レポート


光が丘検修場見学会

江戸名所図会を読む

博物館で行っている事業をいくつかピックアップしてご紹介します。

昨年8月5日に行った練馬区にある**光が丘検修場見学会**は、夏の企画展「トラムとメトロ－都電のすむ町」展のイベント事業の一環として行われたものです。都営地下鉄の車庫を見学し、地下鉄の車両修理の風景を見学したり、実際に運転席に乗ったりして、あっという間に半日が過ぎました。9月から始まった5回連続講座、**江戸名所図会を読む**では、当時の庶民のくらしや風俗、習慣について解説し、しばし江戸時代にタイムスリップ。江戸の人々の様子を挿絵を見ながら理解していただきました。1月に行った**12ケ月めぐり**は七福神めぐり。田端の東覚寺から台東区上野の不忍弁天まで約5キロを三時間かけて巡り、七福を求めた江戸の人たちの足跡をたどりました。**自然史講座**は地形、地質、気候など自然地理的な観察をするために必要な事柄、野外実習を交えながら8回連続でお話しました。

12ケ月めぐり

自然史講座

常設展示・ここがオススメ

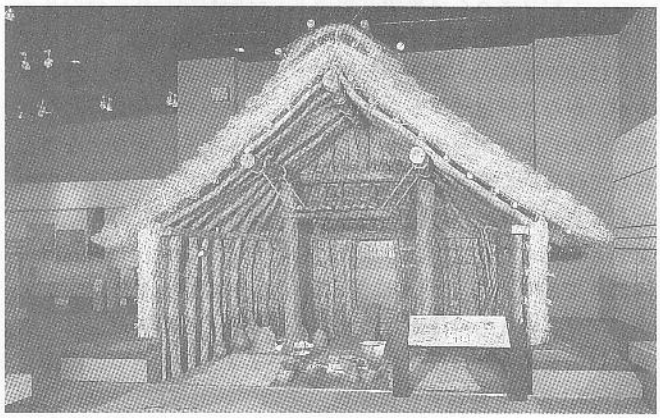
～弥生人のくらしを覗いてみよう～

常設展示室にはいくつもの実物大の建物が建っていますが、弥生時代の竪穴式住居もその中の一つです。この建物は飛鳥山遺跡の博物館建設地区で発掘調査された住居の跡を基に復原したものです。住居の構造は竪穴を50cm程掘り窪め、その中にはさらに柱穴や炉などを掘ります。そして柱を立てて上屋を構築しています。竪穴式住居というと、葺き下ろした屋根が地面についた「伏せ屋根」の形が一般的ですが、今回の復原では屋根を持ち上げて壁を作りました。これは、発掘された住居の跡を観察すると、掘窪めた壁沿いに細い溝がみられ、そこに細い柱を立てていたことが想定できるからです。このようなことから今までとはちょっと異なった形に復原しました。ちなみにこの住居は6畳とキッチンのついた1K程の大きさです。

さて、この復原した竪穴式住居ですが、家全体を前後半分に切り、中の様子が分かるようにしてあります。復原してある部分は入り口寄り半分です。そして奥寄り半分は床のカーペットの色を変えて表示してあります。つまり、復原住居の前に立てば、そこは住居の中なのです。正面をみると入り口があり、外の風景が映し出されています。集落の周りには環濠とよばれる大きな溝と柵が巡らされています。その前を行き交うムラ人。やがて柵の隙間を潜り抜けて、何か盗みに他のムラの人が忍び込んできます。環濠は戦乱の時にムラを防御するために掘られた大きな溝で、西日本から稲作りの技術と共に東日本にもたらされたものです。しかし、東日本で実際に戦乱があったかどうかは分かりません。盗人がやってきて、小競り合いぐらいはあったかもしれませんが。

さて、目を住居の中に向けてみましょう。目の前には弥生人の食事があり、道具があちこちに置かれています。それでは食事をちょっと見てみましょう。炉を囲むように置かれた食器の中には様々な食物があります。弥生時代の米は赤かったことはご存じでしょうか。赤米といって粥状にして食べていたようです。その他にすまし汁、鮎と豚肉の燻製、干蛤、蕨の煮付け、そして桃があります。

ここに復原したのは弥生人のくらしの一コマです。道具や食事など今の私たちのくらしと比べに、見に来てください。



情報ボックス

博物館・あの部屋この部屋

～3階体験学習室～

博物館では様々な事業や講座を行っていますが、「カルチャーセンターで行われる講座とどこが違うの？」という質問が寄せられます。すべての講座にいえるわけではありませんが、参加者が講義を一方的に聴くだけのものではなく、貴重な歴史資料等を直接「見たり」、場合によっては「触れられる」講座を行っています。こういった講座は主に体験学習室で行われています。たとえば夏休みに実施した「親子土器づくり」（写真）もそうした事業の一環として開催されたものです。

今後多くの方々がこの部屋を利用してゆくために、よいアイデアがありましたら、皆様の声をお聞かせ下さい。

4月以降も年中行事や土器づくりなど、楽しい企画を予定しています。参加しないと損しちゃうかも？！

情報コーナーにビデオが多数入りました！

～「紙芝居大全集」～

「世界史大系」「日本文化史」「テレビが伝えた日本の歩み」「日本昔ばなし」他、幅広いジャンルのものを揃えました。

今回紹介するビデオ「紙芝居大全集」全20巻は戦後から昭和30年頃まで街頭で上演された紙芝居を、現役の紙芝居屋が当時の物を使い実演しています。拍子木の音に始まり、紙芝居屋の名調子は当時の雰囲気を再現しています。大人世代には懐かしく子供世代には馴染みの無い紙芝居ですが、街頭紙芝居屋は明治末期、縁日祭礼で子供相手の興行物として行われたのが始まりです。昭和12年には全国で3万人の紙芝居屋がおり、戦争中一時衰退しましたが、戦後の約10年間は再び盛んになりました。テレビの普及により肉筆の街頭紙芝居は姿を消し、現在では印刷紙芝居が残るのみです。

ビデオは閲覧コーナーで、無料でご覧いただけます。

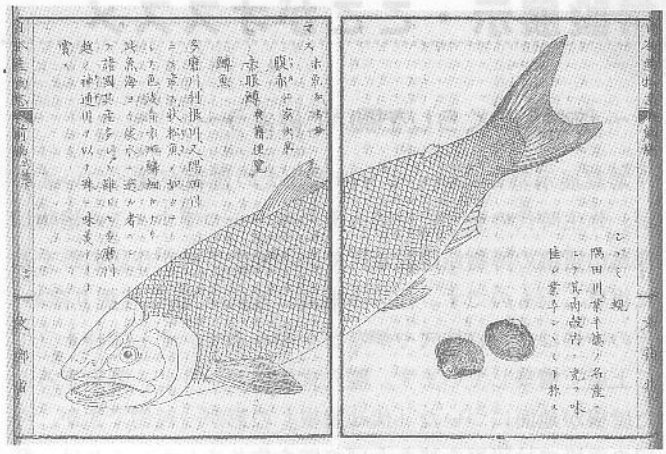
サクラマスの話

博物館の所蔵資料に明治５年（1872）に文部省より刊行された『日本産物志』があります。この書は尾張藩出身の本草学者、伊藤圭介によって著されました。内容的には山城・武蔵・近江・美濃・信濃の５国に産する特色ある鉱物および動植物が紹介されており、現在では見ることができなくなった珍しい資料も豊富に収載されています。博物館では今後折りに触れて皆さんにご紹介していきたいと思います。

第１回目は古来より各種文献で赤魚・腹赤（ハラカ）・赤眼鱒・鱒魚などと呼ばれたマスを取り上げたいと思います。『日本産物志』武蔵部には以下のようにあります。

> 多磨川、利根川、又、隅田川ニモ産ス、状松魚（サケ）ノ如クニシテ色（ママ）淡青赤斑鱗細カナリ此魚海ヨリ淡水に遡ル者ニシテ諸国其産多シト雖ドモ多磨（ママ）川越ノ神通（カミゴ）川ヲ以テ殊ニ味美ナリト賞ス

ここでいうマスとは魚類分類学上ではいわゆるサケ科のサクラマスのことであると思われます。桜満開の飛鳥山でサクラマスとは何か関係のある話かと期待するむきもあろうかと思いますが、単なる洒落ですから念のため。サクラマスをご存じない方のために少々解説することにいたしましょう。イワナなどと並んで代表的な渓流魚にヤマメがいます。ヤマメ（漢字では山女とも表記します）は日本列島では大まかにいって静岡県と長野県とを結んだラインより東方に分布しています。一般的に渓流釣りで知られるヤマメは淡水に棲む陸封型個体をさしますが、ヤマメのうち、降海したヤマメが成長して川を遡上してくる大型の個体をサクラマスと称しています。婚姻色で腹が赤く染まり記事にもあるように赤斑（正確にいえば桜色の斑（まだら）模様）が体表にみられることが特徴で、サクラマスとはそこから名づけられたようです。サクラマスの遡上時期は４月～５月の旧暦初夏の頃です。岐阜県の長良川上流に遡上するサツキマスはヤマメの近縁種であるアマゴの降海型個体ですが、遡上時期からとられた名前がついています。



日本産物志　武蔵部　下巻

さて、そのサクラマスがかつて隅田川（旧荒川下流）にも遡上してきていたというわけです。記事の中で江戸（東京）の多摩川と並んで美味だとされた「越ノ神通川」というのは、食いしん坊の人はすぐ思い出す例のあれです。そう“富山の鱒の押寿司”（筆者も好物）。神通川産の鱒の押寿司は実に多くの人に賞味されてきたようです。江戸時代に荒川に生息していたということはそれ以前の時代にも当然生息していたというわけで、古代人がサクラマスを採集して食べていたことは当然考えられますが、これまで北区の遺跡からマスの骨が出てきた例はあまり聞いていません。釣る技術が未熟だったのか、寄生虫が恐かったのか、それとも…。いろいろ想像をたくましくしている今日この頃です。

写真に見るあの日あの時

～ 昭和30年代半ば　十条商店街 ～

倉田正義氏　提供

埼京線十条駅の西側を南北に伸びている十条商店街（十条銀座）。約40年近く前の写真の中でも、活気とエネルギーに溢れた風情を見せています。

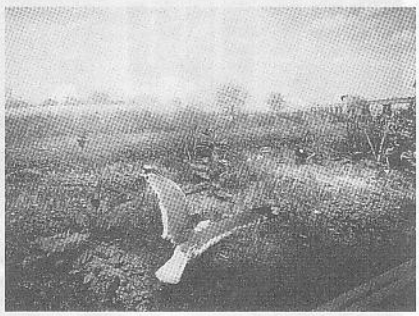
十条駅付近は明治以降、軍工廠や工場の進出にともなって住宅地化が進み、大正の大震災後に転入者が一気に急増した地域です。このため昭和に入ると通りに商店が続々と開業し、昭和10年時で全長約650m、街路の幅員約3.6mの一大商店街に発展しました。その当時すでに街路は簡易舗装され、60本も街頭が設置されていたということです。また戦災を受けなかったため、戦後もいちはやく復興し活気を取り戻しました。

アーケードとなった今も小売店が軒を並べ、買い物客で賑わう風景は昔と変わりません。

Q&A

Q．博物館でよく聞く「ジオラマ」って何ですか？

A．ジオラマとは、前景に模型を置き、描かれた背景で周囲を取り囲む三次元の展示手法のことです。これは特に生物資料の展示に用いられます。動植物などの生活状況を生きた状態でそっくりそのまま展示できれば一番なのですが、なかなかそうはいきません。こうした場合に、それら資料の動態・生態を科学的・歴史的データに基づいて復元し、再現するのです。当館では荒川の水中や河川敷に生息する動植物の生態をジオラマで展示しています。



研究室から

博物館３階の研究室では、日々、各種の講座開催のための準備や特別展、企画展実施のための調査・研究が行われています。本日は、私、博物館・美術館オタクのこの麗しい飛鳥桜子が、研究室で日夜（夜はしないか？）研究にいそしんでいる甘木氏（40代初めの小太り学芸員で、趣味は手作りハム作りという…）にインタビューして、目下の課題についてお話を伺ってみたいと思います。

桜子「学芸員のお仕事って、専門の外に、いろいろ多方面に調査するので大変とか‥」

甘木「うー、まあ、雑芸員といわれることも多いんですよ。でもいつもホットな話題を皆さんに紹介できる喜びを感じて仕事をしています。」

桜子「オッホッホホ、甘木さん、本当にホットで顔が暑苦しいですね。ところで今年の夏の企画展を担当されているとのことですが、どういった準備をしているんですか」

甘木「実は飛行機の展示をする予定なんです。いや冗談ではなく、大正時代に現在の北区神谷の地で、民間では日本で初めて飛行機製造工場を造った人がいるのです」（えっへん）

桜子「それって、ゴムで飛ぶ模型飛行機ではないこと？」

甘木「いや、とんでもありません。飛ぶのはホントの飛行機です。アンリ・ファルマン式というフランスの飛行機を模して、ルノー式エンジンまで作っていたんです。それだけではありませんよ。飛行機を飛ばすための飛行場を用意し、さらに少年たちに操縦技術を教えるための学校まで併設していたんだから驚きですよ、大正ロマンの世界ですよ」

桜子「でも、大正といえば、80年くらい前の話でしょ。資料が残っているんですか」

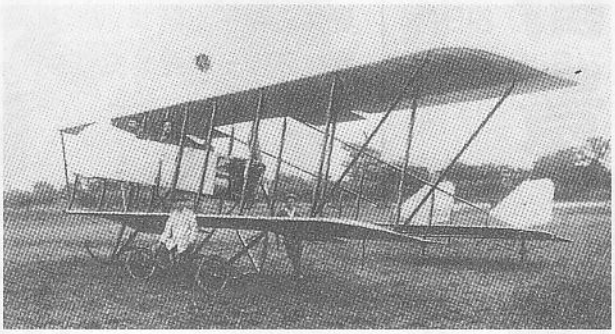
甘木「まあ、あるといえばあるし、ないといえば…（コホンと咳をして）現在、準備中なんですが、なかなか当時の資料が少ないので大変なんです。実はこの岸飛行場関連の資料をお持ちの方がいらっしゃったら、ぜひ情報をお寄せ下されば大変助かるんです。この飛行機製造をした人は岸一太博士といって、もともとは耳鼻咽喉科のお医者さんなんですが、満鉄や台湾総督府の病院長の仕事をなげうって、飛行機の魅力にとりつかれ、独力で事業を興したのです。エンジンを作るためのモリブデン鉱山の採鉱まで手を広げたり、神谷地区になんと、５万坪の用地を得て、飛行機製造を一貫して行っていたんですから」

桜子「ところでどんな名称の企画展なんですか」

甘木「仮称ですが「ひかうき・ぶんぶん、赤羽に飛行場のあった時代」展といって、７月の中旬から８月いっぱい開催する予定です。」

桜子「まあ、それは楽しみですこと、私も園遊会の帰りでもぜひ拝見したいわ」

甘木「……（絶句）げげっ、いや失敬」



赤羽飛行場の「つるぎ号」（大正年間）

博物館めぐり　第２回　渋沢史料館

今回は渋沢史料館を紹介します。こちらは渋沢栄一とその一族に関する膨大な資料が収蔵された個人の記念館です。栄一は埼玉県深谷市血洗島の農家の出身で、幕臣として徳川慶喜に仕え維新後は大蔵省の官僚となり、退官後は実業家として多くの会社や、学校の設立、福祉事業に尽力しました。史料館を一周りすると栄一の数々の業績や多くの知識人と交流した彼の人間像が浮かび上がります。栄一が1867年初めて洋行した際の土産が展示されています。また、栄一の像が史料館内に３体もあります。探してみるのも良いかもしれません。常設展示室は年代順に書籍、書簡等が展示されています。渋沢家一族の系譜を展示したコーナーは大変興味が引かれます。孫の敬三は財界人としてだけでなく民俗学者でも有名で、文学者の渋沢龍彦も親戚にあたります。

史料館では毎年秋に１回企画展を開催しています。３月２０日から開館１周年記念として写真展「さくらほころぶ渋沢史料館」を行います。青淵文庫内の晩香廬（ばんこうろ）は昨年12月に改修工事が終了し、３月２０日から５月５日にかけて内部公開（土・日・祝のみ）します。

● 北区内・おもしろスポット！ ●

「赤紙仁王」ってご存じですか？田端２丁目・東覚寺の門前右手で、赤い紙を体中にベタベタ貼られて立っている一対の仁王様です。赤紙を病気がある場所と同じ箇所に貼ると治るという言い伝えがあり、願いが叶うとわらじを奉納するそうです。

それにしても何と多くの赤紙が『顔』に貼られていることか！そんなに顔を治（直！）したい人が多いの！？そんな話を人にすると、「それは頭痛でしょ」とあっさり。私は『頭』（脳ミソのあたり）に赤紙を貼ってこよう……。

Museum Calendar ミュージアム・カレンダー

4月	16日(金)	民具講座（全7回）
	24日(土)	ビジュアル講座
5月	5日(祝)	年中行事を楽しもう―端午
	9日(日)	企画展講演会「浮世絵系版画に見る北区域」
	19日(水) 20日(木)	第2回遺跡探訪 ― 古墳めぐり　埼玉古墳群をあるく
6月	26日(土)	ビジュアル講座
7月	20日(祝)	16ミリフィルム映写会
	22日(木) 29日(木)	夏休み親子土器づくり
	24日(土) 31日(土)	夏休み親子土器づくり

※6月下旬から7月上旬にかけて燻蒸による体育日があります

企画展
「名所の情景」
浮世絵系版画に
描かれた王子・滝野川
4月3日～5月30日

ミニ展示
「こどもの世界展」
6月13日～6月27日

企画展
「ひかうき・ぶんぶん」
赤羽に飛行場の
あった時代
7月17日～8月31日

お耳を拝借！

・ミュージアムトーク
毎週日曜日の午後2時半より、学芸員による常設展示の解説を行っています。

・ビジュアル講座
偶数月の第4土曜日午後2時から、ビデオや写真、実物資料などを使い学芸員がお話をします。

・企画展「ひかうき・ぶんぶん 赤羽に飛行場のあった時代」
日本最初の民間航空機製造業がスタートしたのは、なんと赤羽の「岸飛行場」です。この生みの親である岸一太はじめ地域の人々が大空にかけたロマンを感じ取って下さい。

〈飛鳥山劇場からのお知らせ〉
八代将軍徳川吉宗が桜を植樹したことで一躍名所となった飛鳥山の花見の様子を、コンピュータ制御の人形や映像で、おもしろおかしく再現します。

上演時間　約25分
10：00　11：00　12：00(土・日・祝のみ)
1：00　2：00　3：00　4：00

利用のご案内

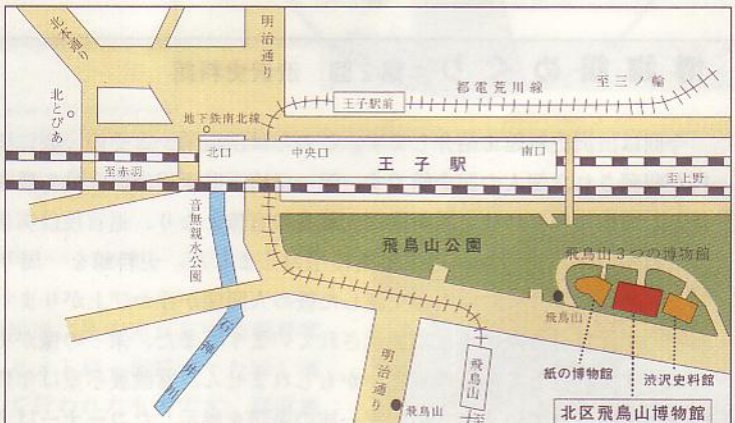
【開館時間】 午前9時30分～午後5時
（有料の展示室への入場は午後4時30分まで）

【休館日】 毎週月曜日（国民の祝日・振替休日の場合は開館）
年末年始（12月28日～1月4日）
国民の祝日および振替休日の翌日（土曜・日曜日の場合は開館）このほかに臨時休館日等があります。

【常設展観覧料】

	個人	団体
一般	300円	240円
小・中・高	100円	80円

・小学生未満は無料
・団体扱いは20名以上
・三館共通券は当館のほか、渋沢史料館、紙の博物館の3館をごらんになれます。（一般720円　小中高320円）



・ＪＲ京浜東北線　王子駅南口より徒歩5分
・営団地下鉄南北線　西ヶ原より徒歩7分
・都電荒川線　飛鳥山停留所より徒歩4分
・都バス茶51、草64、王40各系統　飛鳥山停留所より徒歩2分

編集後記

開館してから、ようやく一年が過ぎようとしています。事業などを通して多くの来館者の方々とお会いしましたが、案外と「博物館のことを知らなかった」「何の建物かわからなかった」といった声が聞かれました。PRに努めたつもりでも、博物館が皆さんにとって身近で自然な存在になるには、まだまだ時間と努力が必要だと痛感します。あれもこれもとスタッフの気持ちは焦りがち…。そんな博物館にご意見がありましたら是非お寄せ下さい。（K.K）

北区飛鳥山博物館だより
ぼいす　Vol.2
発　行　平成11年3月15日
編　集　北区飛鳥山博物館
〒114-0002 東京都北区王子1-1-3
TEL. 03-3916-1133
発　行　東京都北区教育委員会
〒114-0002 東京都北区王子本町1-2-1
TEL. 03-3908-1111（代）
印　刷　添田印刷

刊行物登録番号　10-2-018